地域の人とつながると、学校はもっと面白くなる

― 「お願いする地域」から「一緒につくる地域」へ ―

地域との連携は、会議や行事が増える仕事にも見えます。でも、地域の人の知恵や経験が学校に入ると、子供の学びはぐっと広がります。教頭は学校の窓口だからこそ、人と人をつなぎ、「こんなこともできるのか」という学校の可能性を増やせます。学校だけで全部を抱えるのではなく、地域の力を借り、子供が地域で活躍する場をつくることは、教頭自身の仕事の面白さにもつながります。

工夫1 「何かありませんか？」より得意を聞く

- 仕事・趣味・経験を具体的に聞く。
- 学校の学習とつながる種を探す。
- 地域の会議で顔の見える関係をつくる。

工夫2 子供が地域で活躍する場をつくる

- 発表・案内・企画など役割を探す。
- 地域から認められる経験をつくる。
- してもらうだけでなく地域へ返す。

工夫3 学校のよいニュースを外へ出す

- 子供や職員のよい取組を伝える。
- 具体的なエピソードを添える。
- 困り事も適切に伝え知恵を借りる。

工夫4 依頼で終わらず一緒に考える

- 企画の初めから地域の声を聞く。
- 双方に無理のない形を探す。
- 協力後は成果や感想を返す。

工夫5 つながった人を次につなぐ

- 協力内容と連絡先を記録する。
- 次年度の担当者へ引き継ぐ。
- 人が替わっても続く関係にする。

明日、ちょっとやってみよう

1 仕事・趣味・経験を具体的に聞く。
2 発表・案内・企画など役割を探す。
3 子供や職員のよい取組を伝える。
4 企画の初めから地域の声を聞く。
5 協力内容と連絡先を記録する。



参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・文部科学省『地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン 参考の手引』（平成29年4月）。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。

地域の人とつながると、学校はもっと面白くなる

― 「お願いする地域」から「一緒につくる地域」へ ―

工夫1〜3：関わりの意図と具体的な進め方

工夫1 「何かありませんか？」より得意を聞く

地域の人の仕事、趣味、経験を具体的に知ります。名簿だけでなく、日頃の会話から「できること」「やってみたいこと」を知ります。学校の学習や行事と結び付く種が見つかります。学年の学習内容や学校課題と結び付けると、単発で終わりにくくなります。地域の得意を知るため、学校運営協議会や地域行事で一つ質問してみます。

「子供に何を学んでほしいか」を先に整理し、相手の経験や希望と重なる部分を探します。地域の誰もが無償で協力できるとは限らないため、時間や謝金、交通費などの条件も早めに相談します。できることを聞いた後、直ちに依頼せず、校内の担当者や年間計画と調整します。

工夫2 子供が地域で活躍する場をつくる

地域行事に参加するだけでなく、子供が発表・案内・企画する役割をもちます。司会、展示、清掃、広報など、子供が役割をもてる形を探します。地域から認められる経験が子供の自信になります。学校では見えにくかった得意が発揮される子供もいます。子供が「してもらう側」だけでなく、地域に返せる活動を一つ考えます。

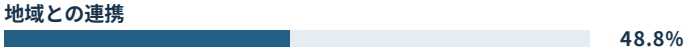
役割は年齢と発達段階に合わせ、子供が参加の仕方を選べるようにします。地域行事への参加自体を目的にせず、学習とのつながりや安全管理、引率の体制を確かめます。校外での活動は学校の手続に従い、子供を大人の都合で動員する形にならないようにします。

工夫3 学校のよいニュースを外へ出す

学校だよりや地域会議で、子供や職員のよい取組を伝えます。写真や具体的なエピソードを交えると、学校の様子が伝わりやすくなります。学校を知ってもらうほど、応援してくれる人が増えます。課題だけでなく、日頃のよい姿を知ってもらうことが信頼につながります。学校の成果だけでなく、困っていることも適切に伝え、知恵を借ります。

公開前に、写真や文章から本人が特定されないか、掲載の同意と範囲に合っているかを確認します。写っている作品や資料にも第三者の権利がある場合があります。よい取組を伝える場合も、子供の氏名、困り事、家庭事情などを不用意に結び付けず、公開用に情報を整えます。

全公教調査から



令和8年度 全校種計21,512人・複数回答
数値の出典は下部の参考資料欄を参照。

調査は教頭の職務への受け止めを示すものです。ここで紹介する工夫の効果を実証した調査ではありません。

参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・文部科学省『地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン 参考の手引』（平成29年4月）。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。

地域の人とつながると、学校はもっと面白くなる

— 「お願いする地域」から「一緒につくる地域」へ —

工夫4・5：関わりを続ける工夫と場面別の判断

工夫4 依頼で終わらず一緒に考える

完成した計画への協力依頼だけでなく、企画段階から地域の声を聞きます。地域側の事情や時期も聞き、無理のない形を一緒に探します。相手のアイデアが入り、連携が主体的になります。「学校のため」だけでなく「地域にもよいこと」を考えると長続きします。協力後は写真や子供の感想を返し、「お願いしっぱなし」にしません。
初めの打合せで、互いの目的、できる範囲、連絡窓口、日程を確認します。学校運営協議会や地域学校協働活動の関係者など、すでにある仕組みともつなぎます。相手の意見を取り入れた点は後から伝え、採用できない提案も理由を説明すると、次の相談につながります。

工夫5 つながった人を次につなぐ

一度協力してもらった人との関係を記録し、次の学年や担当へ引き継ぎます。連絡先だけでなく、何をしてもらい、何がよかったかも残します。個人の人脈を学校の財産に変えます。担当者が替わってもつながりが切れない仕組みをつくります。年度末に「地域資源リスト」を更新し、次年度へ人と経験を引き継ぎます。「地域連携の担当者」だけに任せず、教頭も普段から地域の人の名前と顔、得意分野を少しずつ覚えます。学校のお願いを伝える前に「地域では今どんなことが課題ですか」と聞くと、双方向の連携になりやすくなります。
引継ぎには活動内容、次の改善点、連絡の際の配慮を残します。連絡先は目的を限って適切に管理し、個人の携帯番号を広く配布しません。年度が替わる前に協力継続の意向を確かめ、前年度の協力が今年度も当然に続くと考えず、改めて相談します。

場面で考える（想定例）

地域から、年間計画にない活動の提案が来たら

まず提案の目的と子供に期待することを聞きます。学習との関係、日程、安全、職員の負担を校内で確認し、実施できる範囲や別の方法を相談します。引き受けられない場合も理由を具体的に伝え、次の機会に検討できる内容を整理します。関係づくりのために無理な約束をしないようにします。

自校で試し、確かめる

実践ページの五つの工夫から、今の学校で取り組めるものを一つ選びます。誰に、どの場面で働き掛けるかを具体化し、一週間程度を目安に、本人や関係者と変化を確かめます。続ける点と変える点を一つずつ決め、記録を増やし過ぎずに次の実践へつなげます。

振り返りの問い

- 本人の考えや希望を確かめたか。
- 教頭と担当者の役割は明確か。
- 続けること・変えることは何か。



参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・文部科学省『地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン 参考の手引』（平成29年4月）。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。